

**主 題：神の相続人とされる****聖書箇所：ローマ人への手紙 8章17節**

今から約1000年程前、ジュリア・ジョンソンはこのような歌を書きました。「恵み、恵み、神の恵み、恵み、それは罪を赦し心の内側から清めてくださる、恵み、恵み、神の恵み、恵み、それは我々のすべての罪に勝るものである」と。私たち信仰者は、彼女が言うように神の恵みによって救われた者です。神の一方的な恵みによって神の子どもとされた者です。すでに私たちは、このローマ人への手紙8章15節から「子としてくださる」ということは「養子とされる」ことであると見て来ました。神によって養子とされる、養子となるためには誰かがその行動を起こしてくれなければいけません。私たちの選択でなされるものではありません。自分以外の人がある様に決めてその様な手続きを取る訳です。神の子とされることは神の養子となることと同じことであって、すべてが神のみわざです。私たちが何かをしたからではなくて、神がその様に決心し、そして、そのみわざを成してくださったのです。私たちが喜び、私たちが楽しんでいるこの罪の赦し、救いは神からの一方的な恵みです。ヨハネの福音書1:12に「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とありますが、このみことばは私たちに、救いは実は神の恵みであることを教えています。というのは「神の子どもとされる特権をお与えになった」とあるからです。誰がその特権を与えるのですか？神ご自身です。神ご自身が信じる者にその様なすばらしい特権を与えてくださる。では、その信じるという行為はいつどこから出て来るのでしょうか？聖書が教えているのは、皆さんご存じのように、イエス・キリストを信じるという信仰、イエス・キリストの前に罪を悔い改めてイエスを信じるというこの信仰は神が下さるものだという事です。ですから、救いはすべて神の恵みなのです。

救いは永遠のさばきに値する罪人に与えられる一方的な主なる神の恵みです。私たちはどこから見ても永遠のさばきを受けて当然の者です。私たちのうちを見て救いに値するものではありません。私たちがあの人よりは少しマシだと比較してもみな罪人であることには変わりありません。私たちはすべて生まれながらに永遠のさばきを受けるに値する罪人だった。しかし、そのような私たちに神は一方的に救いを与えてくださったのです。神の恵みです。パウロはそのことを私たちに教えるのです。そして、神の恵みによって救われたあなたは、その救いを絶対に失うことがないと、それが8章からパウロが私たちに教えてくれることです。私たち信仰者、神によって救われた者たちはこの救いを失うことなく、永遠を神とともに過ごす、このような約束をいただいているのです。

そのすばらしい約束をしているパウロは、今日、見ようとしている17節のみことばの中で、救われた私たちは神の子どもとされただけでなく、実は、神の前に私たちは相続人であると言います。17節を見てください。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。」、ここでパウロが語ったことは、これまでに語って来たことのその流れに見事に沿っているものです。というのは、神の子どもだからその神からのいのちをいただいた、永遠のいのちをいただいていると、そのことは13-14節で見ました。神の子どもだということは、前回見たように、その人のお父さんは神です。だから、私たちは「アバ、父。」と呼ぶのです。14-15節で見ました。ゆえに、私たちはその父親から財産を相続するのです。神の相続人なのです。そして、主イエス・キリストご自身も神の御子であるゆえに、私たちは彼との共同相続人であると、そのことを17節で教えられているのです。救われた私たちは相続人であると言います。どういう意味なのか、ごいっしょに見て行きましょう。

**☆相続について****A. 相続人**

「相続人」とは、法律によればそれは「相続により被相続人の財産に属した一切の権利義務を包括的に承継するものである」と言います。要するに、一般的には私たちは自分の親から遺産を受け継ぐのです。この件に関して、私たちはいろいろな所でそのことを見ているし、ひよっとすると、この中でも多くの皆さんが実際に経験なさったかもしれません。私たちがパウロが言わんとしていることを理解するために、前回見たバークレーが記した「養子の結果」についての記事を思い出してください。このような記事がありました。その養子の結果として「その人は彼の新しい父親の財産の相続人となった。例え、他の息子たちが後に生まれ真の血統関係があつとしても、それは彼の権利を侵すものではない。彼は彼らとともに共同相続者としての地位を確保したのだ。」と、パウロが17節で言わんとしたことはまさにこ

のことです。私たちは養子としての権利をいただいた。その後、その家族に子どもが生まれたとしても、血のつながりがあってもなくてもその権利を有した者は、その子どもたちとともに財産の共同の相続者となる、その様な地位を確保することができたということです。

パウロはこの17節で、この相続人である私たち信仰者に対して、「相続」ということがどんなにすばらしいものであり、それにはどのようなものが含まれているのか、それを説明しようとしています。見て行きましょう。

## B. 神の相続人

「相続人」ということは分かりました。別に詳しい説明は要りません。でも、パウロはそれで終わったのではなくこのように言います。「**私たちは神の相続人であり**」と。確かに、この相続に関して、パウロ自身様々な箇所で、あなたがたはこのようなものを相続しましたと教えています。例えば、ローマ4：13では、アブラハムへの約束が信仰者にも及んだということが記されていました。「**というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。**」。これはすでに学んだことですから詳しい説明はしませんが、「**世界の相続人となる**」という約束が与えられたのはアブラハムに対してです。しかし同時に、信仰者である私たちもその約束を共有する者になったとパウロは教えたのです。ですから、ガラテヤ3：29では「**もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。**」と書かれています。救われているなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、このアブラハムに与えられた約束は、実は、あなたがたも受け継いだことになるのだと言うのです。同じガラテヤ3：9にも「**そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。**」とあります。

その約束はどのような約束だったでしょう？大きく分けて三つありました。一つは「**土地に対するもの**」でした。カナン<sup>1</sup>の地を与えるというのです。ヨシヤが実際にこのアブラハムの子孫であるイスラエルの民を連れて約束の地に入って行きます。二つ目は「**子孫に関するもの**」です。地のちりのようになる、また、天の星のように子孫が増え広がると。出エジプトのときにはイスラエルの民はその様に増え広がりました。三つ目は「**救世主に関する約束**」でした。あなたの子孫、つまり、救世主によって地のすべての国々は祝福を受けるようになるというのです。救世主とはメシヤ、救い主のことです。ガラテヤ3：16ではそれがだれであるのかパウロははっきりと教えています。「**ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言って、多数をさすことはせず、ひとりをさして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリストです。**」と。

ですから、アブラハムに約束されたすばらしい約束の中でもっともすばらしい約束は、土地が与えられたことよりも、子孫が与えられることよりも、「**救い**」なのです。アブラハムに約束された「**わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。**」(創世記17：7)の通りです。この約束を私たちが受け継いだと。つまり、アブラハムが信仰によって救いにあずかったように、私たちも信仰によってこの救いにあずかるのです。アブラハムを通してすべての国民、異邦人も、信仰によって義とされたアブラハムと同様に、救われる、その祝福があると言うのです。ですから、神はアブラハムに約束を与えられた、その約束の相続者として、その約束を信仰者である私たちにも与えてくださるということです。確かに、このことが分かります。

しかし、今私たちが見ているのは、何かの約束をいただいたということではないのです。もう一度ローマ書に戻って、パウロは「**私たちは神の相続人だ**」と言うのです。アブラハムに与えられた約束の相続人だと言っているのではありません。確かに、そのことも教えられているのですが、ここでパウロが言っていることは、私たち信仰者は「**神の相続人だ**」ということです。だから、神の約束を相続したとか、そのような約束が与えられたということではなくて、**神ご自身を相続した**ということです。これは新しいことをパウロが教えたものではありません。なぜなら、今まで私たちは、神ご自身と親しい交わりを持つ関係に入れられたということをお教えされて来たからです。私たち信仰者が覚えなければいけないことは、私たちは全能でありすべてを造られ治めておられるこの神とこんなにも密接な関係に入れられているのです。私たちは神をいただいたのです。その祝福について、パウロはより詳しい説明をその後に加えます。

## C. キリストとの共同相続人

17節の後半に「**キリストとの共同相続人であり**ます。」とあります。「**相続人**」だと言ったパウロは、あなたは「**神の相続人**」であり、そして、今度は「**キリストとの共同相続人**」だと言うのです。つまり、パウロはここで、イエス・キリストが相続するものを私たち信仰者もともに相続すると言うのです。だから、「**共同相続人**」なのです。二人以上の者が共同で遺産を相続する訳です。なぜ、このことが起こったのでし

よう？パウロは繰り返し教えて来ました。それはイエス・キリストと一つにされたからです。思い出してください。ローマ6：3-4「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。：4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」、パウロがここで繰り返したことは、私たちはイエス・キリストと一つにされているということです。一つとされているゆえにイエス・キリストが相続するものを私たちも相続すると言います。では、どのようなものを相続するのでしょうか？

## ○キリストと共同で相続するものとは？

### 1. 栄光の共有

17節には「**私たちがキリストと、栄光をともに受けるために**」とあります。これがイエス・キリストがお受けになるものです。イエスが祈りをなされたとき、ヨハネの福音書17章に記されている箇所ですが、17：24「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。」と地上のことではありません。「あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」、つまり、イエス・キリストのその栄光の中に私たちが招き入れられるということです。それがどんなに素晴らしいことなのか、実は、このローマ8：18-30を見ると、この「栄光」ということをテーマにパウロは記しています。18節にはこのように書かれています。「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」。30節を見ると「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」とあり、栄光のことです。つまり、パウロは18節から30節に、私たち信仰者には素晴らしい約束があること、そして、その約束を得るまで—これから見て行きますが—私たちの信仰生活は大変であること、でも、その大変な中であってあなたが勇気を失わないために、あなたが希望を持って歩み続けて行くために、どんなに素晴らしいご配慮が神によってなされているのか、パウロはそのことをこの箇所で教えているのです。というのは、私たちはキリストとの共同相続人として、素晴らしい栄光を相続しますがそれだけではないのです。

### 2. 苦難の共有

私たちが同時に相続するものは「苦難」です。苦しみです。パウロはそのことを言うのです。そのことを教えて、そしてパウロは、大変な生活が待っているから、でも、その中であってあなたが希望を失わないように、このような神のご配慮があると教えて行こうとします。

#### (1) 苦難の現実

パウロはこの17節で、苦難が現実のものであること、信仰者には必ず苦難が伴うということをお教えようとしています。17節「**栄光をともに受けるために**」と、その後「**苦難をともにしているなら**」とあります。私たちが覚えなければいけないことは、実は、この箇所に「もしそれが真実なら」という接続詞が付いていることです。新改訳聖書では「…しているなら」と訳されていますが、この接続詞の意味は「もしそれが真実なら」です。いろいろな辞書を見ると、ただ「もし」と訳しているもの、「もしそれが真実なら」と訳しているものがありますが、パウロは敢えてここでこの接続詞を使ったのです。この接続詞は新約聖書の中に6回しか出て来ません。パウロは何のためにこのことばを使ったのでしょうか？なぜ、私たちがこのことにこだわるのかというと、それによってパウロが言いたいことがはっきりするからです。なぜ、「もしそれが真実なら」という接続詞をパウロがここで使ったのかという解説、説明をする前に、この17節のみことばの原語を直訳するとこのようになります。「今もし子どもであるなら、私たちは相続人でもありません。神の相続人であり、キリストとの共同相続人でもありません。もし私たちがまた栄光をともに受けるために、私たちが彼と苦難をともにしているのが真実であるなら。」と、つまり、苦難をともにしているということは現実の問題だけではない。現実にもそのような苦難を経験している人は相続人でもある。言い換えるなら、神の子である、救われているということです。つまり、苦難というのは救われているあなたに付きものであると言うのです。それが先ほど説明した通り、この接続詞をどのように使っているかを見たときに分かることなのです。例えば、

(a) ローマ3：30「**神が唯一ならばそうです。**」、「**ならば**」とありますが、これは神が唯一であることを疑っているのでしょうか？違います。「神が唯一だ」ということを強調しているのです。

(b) ローマ8：9「**けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、…**」、「**もし…なら**」と訳されています。これは住んでいるのか住んでいないのかよく分からないと言っているのではなく、イエスを信じている人には確実に聖霊なる神が内住していると言っているのです。どちら

か分からないという意味でこの接続詞が使われているのではありません。あなたの内には聖霊が住んでいるということを確認しているのです、

(c) Iコリント15:15「なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、…」、「もしもかりに、」とキリストの復活、また私たちの復活を疑っているのでしょうか？イエスの復活は事実ではなかった？そのようなことを言っているのではないことは明らかです。イエスは復活されたゆえに、私たちも復活すると言っているのです。

ですから、確かに、この接続詞は「もしそれが事実ならば」と訳せるのですが、それは事実を疑っているのではなくて、逆に事実を強調しているのです。そうすると、私たちが今日のテキストであるこのローマ8:17を見た時に、パウロが言っていることは「もし私たちがまた栄光をともに受けるために、彼と苦難をともにしているのが事実であるならば、」です。つまり、イエスを信じているあなたは、イエスと苦難をともにしていることが事実だということを強調したのです。パウロは「信仰者であるあなたには間違いなくいろいろな苦難が伴う。」と言っているのです。あなたは実はそれを相続したと言うのです。IIテモテ3:12でパウロは「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と言っています。一生懸命キリストに従って行こうとすれば、あなたがイエスに喜ばれる生き方をしようとすればするほど、世の人々はあなたを迫害すると言うのです。いろいろな問題が生じると言うのです。イエスご自身がそうでした。大変な苦しみを受け大変な迫害をお受けになりました。ですから、「キリストとの共同相続人」とは、彼の祝福だけでなく、彼が経験された困難も共有すると言ったのです。ヨハネの福音書15:20に「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。…」とあります。ですから、信仰者の皆さん、もしあなたがイエスを信じることによって問題のない生活を期待していたとしたら、もうすでにその現実気付かれていますと思いますが、それとは全く違う生活があなたには起こっているはずですよ。

この社会の中にあつて神に喜ばれる生き方をしようとすると絶対に摩擦が出て来ます。人々はあなたを歓迎しないのです。なぜでしょう？パウロはコロサイ人への手紙の中でその答えを私たちに与えてくれています。コロサイ1:24にこのように教えています。「ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。」。ここから二つのことを覚えましょう。一つは「キリストの苦しみの欠けたところ」の意味であり、もう一つは「満たしている」ということです。

#### (a) 「キリストの苦しみの欠けたところ」

皆さんご存じのように、これはイエスがなしてくださった十字架での救いのみわがが不完全だった、だから、私たちがそのみわがを完成するためにお手伝いをしなければいけない、そういうことではないことは明らかです。イエス・キリストが十字架の上でなしてくださった救いのみわがは完璧でした。どんな罪人でもイエスによって完全に罪赦されて救われるのです。完全なみわがでした。では、ここでパウロが言わんとしていることは何でしょう？「苦しみ」とは何でしょう？19世紀の神学者のライト・フットが言うように、「このことばは人生において、また働きにおいて、我々の主が耐えられた苦しみを表わしている。」と。イエスがこの地上にあつて実際に経験なさった、また、実際に耐えられた苦しみを指していると言うのです。救いのことではないのです。確かに、このことばは新約聖書の中において、決してイエスの犠牲的死を表わすことばとしては使われていません。ですから、イエスご自身がこの地上にあつて耐えられた様々な苦しみを表わしているのです。ということは、イエスが約33年間の生活を通して経験された様々な苦しみを、あなたも経験するということです。肉体的な様々な苦痛、様々な困難や苦悩、また、人生の試練というものをあなた自身も経験するということです。人々はいろいろな機会にイエス・キリストを苦しめ迫害しました。そして、イエスがなくなった後もその迫害は終わらないのです。人々があなたの内にイエス・キリストを見るなら、2000年前と同じことを人々は為そうとするのです。イエス・キリストを歓迎しない人々はあなたを歓迎しません。イエス・キリストを愛そうとしない者はあなたを愛することはありません。あなたの内にキリストが見えれば見えるほど、人々はあなたに対して、人々がイエスに対してしたように、様々な苦しみへと追いやって行くのです。

ですから、どの時代であろうと、どの国でも、人々がイエス・キリストに対して取った態度はこのようであると見ることができます。信仰者の皆さん、あなたはどのように思っておられるかもしれません。神に喜ばれるようにとこの社会で一生懸命生きようとしている、しかし、周りの人々はそれを感謝しないし喜びもしない、逆に、私のことを煙たいと言うと。あなたに対するいろいろな噂が立つかも知れません。私たちが覚えることは、それは当然起こることだということです。イエスを苦しめた人々は、イエスと一つとなっている私たちを同じように苦しめるのです。もし、世の中が私たちを歓迎するなら、

ひょっとしたら彼らは私たちの内にキリストを見ていないのかも知れません。しかし、私たちが神の前に正しく生きようとするなら、世の中は私たちを煙たがります。そうなるという約束を私たちはいただいたからです。私からこんなことを聞くと皆さんは「そんなものは要らない」と言われるかもしれませんが、実は、それがどんなに大きな祝福なのかを次回見て行きます。

神のなさることはすべてにおいて最善です。「なぜ、私にこんな苦しみがあるのか？真面目に生きているのに何でこんなに苦しむのか？正しいことをしているのになぜこのように誤解されるのか？」。イエスを見てください。イエスはすべてにおいて正しく完全だったのに、人々は何とかして偽りによって彼を訴え捕らえ殺そうとしたのです。誤解されっぱなしでした。私たちはキリストとともにその様な苦しみをも共有する者となったのです。

#### (b) 「満たしています」

これは「お返し」と「満たす」ということばが合成して出来ていることばです。つまり、この地上にイエスがおられた時、人々はイエスを攻撃しました。もちろん、イエスに従う者たちにもそうでした。イエスは天に凱旋されたから、今度は残されている私たちの番です、あなたはその苦しみを経験すると言うのです。なぜ、世の中が私たちを憎むのか、その理由を見て来ました。私たちがクリスチャンだからです。ヨハネの福音書 15 : 18 - 19 でイエスはこのように言われました。「もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。:19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。」と、私たちがこの世に属している者なら、世は私たちを迫害することはありません。私たちはこの世のものではないのです。この世に属していないのです。だから、人々は私たちを退け者にし、仲間はずれにします。煙たい存在だからです。その事実を教えた後、パウロはこのように言います。

#### (2) 苦難に対する報い

ローマ 8 : 17 をもう一度見てください。「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、」とあります。「栄光を受けるために」、確かに、私たちはこの地上で信仰者として神に対して忠実に歩み続けようとするといろいろな苦しみが出て来ます。でも、それに対する神の報いがあると、パウロはここでも教えているのです。「栄光をともに受けるために」、確かに、その約束があることは見て来ました。しかし、パウロがここで言っていることは、あなたはその苦難を通して栄光を受けるようになるということです。どういう意味でしょう？ルカ 24 : 26 にこのように記されています。「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」、イエス・キリストは苦しみを経て栄光に入っていくのは、その主と一体であるあなたもいろいろな苦しみを経て栄光の中に入っていくのです。ですから、皆さん、より大きな祝福が与えられる人は、苦難の中、妥協せずに忠実に歩み続けた信仰者なのです。確かに、私たちはこのような栄光の中に招き入れられます。私たちはそこで神を誉め称えます。しかし、確かに、私たちが地上にあってどのように歩んだのか、そのことが天に行った時に明らかになり、違いが出るのです。私たちは天に行った時、確かに、神を崇めます。しかし、私たちの地上の歩みが天でどの様に神を崇めるのかに関わっています。ということは皆さん、イエスのことを思い出して、イエス・キリストはいろいろな苦しみの中で忠実に完璧に父なる神のみこころに従われました。最高の栄誉を受けるのです。そして、私たちも彼と一つにされているゆえに、地上においていろいろな摩擦を経験します。でも、その中で忠実に歩み続けて行くなら、私たちも同じように神から素晴らしいご褒美をいただくというのです。

なぜ、忠実であることが神によって祝されるのでしょうか？思い出してください。「よくやった、良い忠実なしもべ」と。神が私たちに望んでおられることは、私たちが人からどれ程の称賛を受けることをするのかではなく、神のみことばに従い続けることです。それが神があなたに要求されていることです。それを神は誉められるのです。それを神は喜ばれるのです。ですから、確かにパウロが言ったように、私たちは地上にあっていろいろな苦しみを経験します。しかし、その中で私たちがしっかりと主を見上げて忠実に歩み続けて行くなら、それに対して神は素晴らしい報いを与えてくださると言うのです。

この中にそのような困難を恐れて妥協している人はいませんか？この社会において、主に対して忠実に歩み続けることは非常に難しいです。皆さんがおられる職場や学校はすべてが正しい訳ではないでしょう。ひょっとしたら、そこに何か不正があるかも知れません。そういうことに加担しないこと、また、私たちはこのような全く神を恐れない社会に住んでいます。特に、私たちの国はそうです。神を恐れることがない、神を敬おうともしない、そのような国に私たちが生きていて、その中で神を敬いながら、神のみことばの優先順位に従って生きて行くことは大変なことです。ですから、いろいろな選択があり、その中で私たちはときに妥協してしまうかも知れません。例えば、私たちは社会にあって仕事をすると

いう大きな責任がありますが、その中で神の言われるその優先順位に照らすと、間違いなく、神の次に家族が来るはずですが、しかし、この国は今「仕事が一番」と言います。信仰者であるあなたはどうしますか？「確かに、聖書はそう言っているけれども、現実の問題を考えるなら、私たちは仕事をしなければいけない。」と言って私たちは妥協するのです。

先ほど、私たちが賛美した曲を思い出してください。「進め、主イエスの兵士らよ！」と、私たちはキリストの兵士であって、このキリストに喜んでいただくために生きているのです。私たちの地上における目的は好きなものを手に入れるためではありません。私たちが救ってくれた神に喜んでいただくために生きているのです。そうすると、私たちが考えなければいけないことは、確かに、世の中はそのように要求する、社会は要求する、会社は要求する、しかし、その中で私たちの選択はどのようなかです。例えば、クビになったとしても彼らができることはそれだけです。しかし、私たちが主に従い続けて行くなれば、主が養うだけでなく、主の前に立ったときに主がそのことを喜んでくださるのです。「よい忠実なしもべだ」と言われるのです。私たちはどこかでそのことに目を閉ざしていませんか？仕方がないと思っていませんか？今、私たちに必要なこと、これまでもこれからも必要なことは、その様な油断が私の中にあったり、妥協を迫られる様々な所にあつて、私たちがキリスト者として正しく生きて行こう、私たちは妥協することなく神を信頼して神に従って行こうとし、そして、神のみわざを期待する、そのようなキリストの兵士であることです。あなたはそのような兵士ですか？

信仰の勇者たちが過去に歩んで来た生き様はそうです。彼らはときにいのちを狙われました。キリストのためにいのちを落としました。しかし、彼らは喜んでそのようにしたのです。なぜなら、神に従うことが彼らのいのちだったからです。いのちそのものだったのです。神が喜んでくださる、それで良いと。あなたの人生が終わりを迎えるときに、何をして来ても神の前に「ごめんなさい」と、それで終わりと思いませんか？「どんな罪でも赦されるから、まあ世の中で適当にやって、最後に神に謝ればそれでいい。」と、これが神が喜ばれる忠実な生き方でしょうか？

パウロが私たちに教えていることは「あなたは神の相続人とされている。キリストとともに約束を相続する、共同相続人だ。」ということです。確かに、素晴らしい永遠が約束されています。しかし、私たちはこの地上にいていろいろな苦しみがある、頭を悩ますことがある、難しい問題がある、仕事を失ったらどうしよう…、でも、仕事を失うことよりも、神を悲しませることの方が私たちにあって嘆きであることを覚えなければいけません。パウロが繰り返し教えていることは、「あなたはかつての生き方から救い出されて、あなたは生まれ変わったのだ。あなたが生きているのは、これまでと同じ目的ではなくて、神の栄光のために生きるのだ。」です。それを実践するには神の教えに従うしかありません。

皆さん、よく覚えなければいけないことは、イエス・キリストが語った救いへの招きのメッセージ、福音です。イエスは「天国に行きたいのならただわたしを信じなさい。」とそのようなメッセージを語ったのではなかった。マタイの福音書 16 : 24 - 25 でこのように言われています。「それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。：25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」。天国に行きたいからただ何となく「信じます」などと言うのは、聖書の教える救いではありません。イエス・キリストが私たちに命じられたことは「あなたは自分を捨ててわたしについて来なさい。」です。両親を敬わなくてもよいと言っているのではありません。子どもを愛さなくても良いと言っているのではありません。でも、「両親よりも子どもよりもわたしを愛するか？」と言われるのです。そして、信仰の勇者たちは「はい、私は何ものよりもあなたを愛します。」と言って、その決心は主に従うという行動によって証明されたのです。

イエスがマタイ 13 章で話された例えを思い出してください。岩地に蒔かれた種のことです。20 - 21 節「また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。：21 しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまいます。」、信仰者はその苦しみや問題や困難の中にあつて、失敗するかも知れない、時には妥協するかも知れない、でも、神に喜ばれたいとそのことに気付いたときに、そこから離れて神の前に正しく歩んで行こうとする者たちです。しかし、イエスが言われたように、ある者たちは「みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる」かも知れないけれど、いろいろな「困難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまいます。」、すぐにキリストを捨てて離れてしまうのです。つまり、この人たちは救われていないのです。信仰者は神を見上げて、そして、神のために歩んで行こうとします。

17 節を見て「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともしているなら、」、お気づきになりましたか？私たちが一人で苦難を受けているのではないのです。神を敬わない会社の中で、正しい価値観をもって、結果的に「明日から来なくいい」と言われるかも知れないけれど、それを恐れずに神

が喜ばれることを選択して行く、その信仰の歩みにおいてあなたは決して一人ぼっちではないと言うのです。会社において学校においては一人ぼっちかも知れない、でも、あなたは一人ぼっちではないと言うのです。見てください。「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしている」のです。あなたのその苦しみは一人で味わっているのではないのです。だれかがともにいてくれるのです。誰ですか？キリストです！主があなたとともにいてくださり、あなたに助けを与えてくれるのです。あなたに励ましをくれるのです。神のご配慮の一環を見たのです。この後、パウロはそのことを続けて教えて行きます。

あなたが心配しなければいけないことは一つだけです。「わたしに対して忠実か？この世と妥協していないか？」と、あなたの選択、歩みは神の前に喜ばれる忠実なものかどうか？です。それを考えなさいと言われます。キリストがあなたとともにいてくださるのです。一人で苦しむものではありません。一人で悩んでいるのではない、キリストがともにいてくださる。ここまで配慮をしてくださっている神は、私たちがどれ程この方を信頼して忠実に歩み続ける歩みを期待しておられることでしょうか。神はそのような歩みをあなたに期待しておられます。信仰者の皆さん、私たちは神からすばらしい祝福を相続しました。栄光です。しかし、様々な苦難もまた祝福なのです。苦難のその目的を私たちがしっかりと覚えるなら…。そのことについては次の機会に見て行きます。しっかりと主を見上げて忠実に歩み続けることです。